

奨励賞

子供達にたくさんのお絵本を読み聞かせて

心の教育を充実させたい

岡戸 由紀子

拝啓

柳田先生、朝晩はすっかり涼しく感じられるようになりましたが、お元気でいらっしゃいますか。

今日は、絵本が子供の心の教育に役立った話をさせていただきます。いただきたくお手紙にしました。

私には、生まれつき指のない（義）妹がおります。私に子供が生まれ、大きくなってきた時に、『子供達が、妹を傷つけたらどうしよう』というのが、私の悩みになってきました。子供達に、『障害がある』という事を伝えるにはどうしたら良いか、色々と考えている時に“さつちゃん”のまほうのて”という本に出会いました。この本は

生まれつき手の指がない主人公のさつちゃんが、友達にいじめられ、自分が他人と違う事を、どうしてなのか両親を責めます。さつちゃんは傷つきながらも、お父さんに『指がなくても何でもできるさつちゃんの手はまほうの手だよ』と言ってもらい、さつちゃんは自分の障害を受け止める、という内容です。私はこの本を、何度も子供達に読み聞かせをしました。そうしていつの間にか、私の子供達は、妹を傷つけることなく、成長していきま

した。ある時、私は子供達に、妹の指の事について何か思った事はないのか、聞いてみました。子供達は揃って『さつちゃんの手と一緒にだよ』と言いました。もしかしたら、指がない事に気がついていないのか、と思ったりもしましたが、子供達はしっかりと『障害がある』ということを受け止めていました。絵本のお陰で、障害という

事を受け止められたのは、素晴らしいことですね。その後、子供達は、色々な障害のある子供達の本を探してきて読むようになった。

最近ニュースでは、“盲導犬が傷つけられた”とか、“白杖を使っている女子高生がけとばされた”という事件の報道がありました。小さい頃、障害がある方達の絵本を読んで、心の教育ができていれば、このような事件は起きなかったかもしれません。とても残念です。

そして、もうひとつ残念な事があります。それは、妹は小学生の頃、指がない事でいじめられていたそうです。兄である私の夫は、助ける勇気がなく、見守るしかなかったと、辛かった思いを打ち明けてくれました。もし妹の周りのいじめていた子達が、“さっちゃんのまほうのて”と出会っていれば、いじめられる事もなかったのかな、と思うと、とても残念です。今は、心に余裕がなくな

他者を思いやることのできない人が多くなっています。これからの子供達には、小さい頃から、たくさん絵本を読み聞かせ、心の教育を充実させて欲しいと願っています。

柳田先生、また来年、お手紙を差し上げます。
どうぞお身体をご自愛ください。

敬具

【柳田邦男さんからのメッセージ】

私は、障害をもって生きてきた人たちや、そういう人を養育したり支えたりしてきた人たちの手紙を募って、すぐれた作品を世に広めるNHK障害福祉賞の選考委員を、30年ほど務めてきました。多くの障害をもつ人たちが幼少期を振り返った文章を読みますと、ほとんどの人が差別やいじめを経験しています。

それでも最近は、学校での教育や社会の理解が進んだことから、まだ完全ではないにしても、ずいぶん差別やいじめは少なくなっ

できたように感じます。

また、子どもたちに障害のある人を差別の目で見ないで、その人の個性を理解してあげるように気づかせてくれる絵本がいろいろ出版されるようになってきました。

岡戸さんが自分の子どもたちに差別心を持たせないようにするために、『さっちゃんのまほうのて』という絵本を何回も読んであげたのは、すばらしい子育てですね。

その影響で、岡戸さんの妹さんが生まれつき指のない手をしていても、子どもたちは妹さんを傷つけるようなことをしなかったということですから、人の差別心というものは、親の育て方で十分になくすることができるのだということがわかります。

しかも、こどもたちは、自分でもいろいろな障害のある子どもについての本を探してきて読んだということです。私はとても感動しました。

親による絵本の読み聞かせは、子どもの「心の教育」として、

大きな影響力を発揮するのだということを、実践例で知らせてくれた便りとして、私は受け止めました。